
愛を読む人

マーヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛を読む人

【Nコード】

N0538N

【作者名】

マーヤ

【あらすじ】

王族や貴族 高貴なる血族達が魔法をつかうのは当たり前な中侯爵の娘パズリーは魔法に必要な魔力が一切なかった。しかし第2王子アレンのおかげで彼女は魔力なしにもかかわらず王国学院で学ぶ事が出来ていたのだが 王子に彼女ができてからパズリーの人生が一気に変わり 彼女は実家に勘当されてしまい 貴族の街をでて新しい人生を歩もうと前向きに生きようとしていたが とある大魔法使いとの出会いをきっかけに パズリーは再び王族や貴族達の世界へと舞い戻るのがたった・・・

the reader（邦題 愛を読む人）の終わりのような切
ないながらも 純愛！ でもアンハッピーエンド的な ラブストー
リーを指して 書いて行く予定

愛を読む人をベースにしつつ（多分全然ちがってくるけど 希望と
して。。。自分の性格上 多分 全然違った話になるけれど）

君が僕のそばにいてくれる

それはずっと変わらない事だと

君が僕の隣からいなくなるなんて

どうして僕は君が離れて行く事を考えず

そばにいる事を当たり前のようにおもっていたんだろう

今君は何を思っているんだろう？

君はどこにいるんだろう？

もう一度 君の笑顔がみたいよ

もう一度 君の横にいて

もう一度 君と一緒に笑い合いたいよ

もし あの日に戻れるなら

やり直せる事なら やりなおしたい

僕は 二度と 君を失いたくない。。。。

願う事なら

君も 僕の事をおもっていてほしい

君と僕の道が重なる事を

切実に思う

パズリー。これからもずっと君の事だけを愛してる

愛しているよ

愛してる

だから君に逢いたい

あつて 今まで言えなかった事をいうよ

僕の横で

僕と一緒に歩んでくれないかな

愛してる

1（後書き）

泣きたい話をよみたくて
突拍子もなく 書いてみようとして だしだけかいてみた

2（前書き）

注釈。プロットなしの場合たり小説なので　そこところご理解ください。

貴族が魔法を使う事を当たり前と認識していた

基本貴族は魔法を使えるのが当たり前

平民でも魔法を使える者はいたけれど。。

シリア王国のとある街

貴族達が住む街アベレスティン

虹の街とも呼ばれる美しい場所

そこに住むとある侯爵家の長女には魔法に必要な魔力が一切なかった

しかし まるで彼女の魔力を奪い取ったかのように彼女の妹の实力は

まわりをうならせるほどだった。

もちろん大魔法使いのドルーの足下には及ばないのだが

姉である彼女が魔力0であったため侯爵は妹を大層かわいがっていたが

それでも 魔力無しの貴族の子供は捨てられるのが当たり前な世の中で

彼女が侯爵家の娘として 今も生きていられる事に 幸せをかんじているのだった

彼女の名前は パズリー。

パズリー・セレスティナ

聡明で 人を思いやる事のできる心優しい彼女は

魔力がないせいで 幾人かの貴族に蔑まれても

気を配り 魔法は使えずとも王国学院で勉学に励んでいた。

一応 貴族の嗜みだからと

自分に言い訳して・・・

「パズリー。君 今日も古代魔法のテストで一位だったらいいじゃないか！」

まるで自分のことのように嬉しいがる彼は

このシリア王国の第2王子 アレン。

「実技は全滅だけだね？苦笑」

「パズリーはそういうけど、魔力があつたとしても 魔法について正しい理解がないと発動しない

君がそこまで自分を過小評価するのは君の悪いくせだ！」

「・・・そうね いつもごめんね ありがとうアレン。」

小テストや 進級テストなどの結果がでるたび

パズリーとアレンは同じような会話をする

そして 毎度彼女は思ふのだ

もし 自分がセレスティナ侯爵の娘ではなかったら

セレスティナ侯爵が王の右腕の信頼のある宰相ではなかったら

彼女はアレンと出会う事はなかっただろうと。。

そして アレンと出会う事がなかったら

今こうして王国学院に通う事はなかっただろうと

アレンがいなかったら

きっとパズリーは今のパズリーではなかっただろう

そう 彼女は自分でおもっているのだ

いまのパズリーがあるのは すべてアレンのおかげなのだ

第2王子の口添えがなければ 彼女の入学は認められなかっただろうから

アレンはパズリーのすべてなのだ

だから パズリーはいつも いかなるときもアレンに協力をおしまなかった

彼の苦手な魔法陣のクラスの課題も尽力をつくしたし

魔力がないながらも知識で実技の練習を手伝ったし（たまに口論はあったがうまくいった）

王子だからということで 剣術のクラスで彼が手加減されたときも彼女だけは

アレンに彼女の実力すべてで模擬戦をおこなっていた（そして彼女は強く数回に1度負けるぐらいだった）

パズリーとアレンの関係はすごく良好なのだ

だから学友達はみんなおもっただろう

数年後には新しい風がふくだろう 新しい時代へと

魔力がなくなると 人々がともに歩む時代がくると

パズリーがその礎となると。

しかし 王国学院卒業まであと1年半 第2王子に彼女ができたのだ

彼女の名前はケイト・リール

リール右大臣の娘でありパズリーの親友

アレンからのアプローチと パズリーの協力で ケイトとアレンは付き合う事になった

多少いざこざがあったとしても まわりは彼らの交際を少しずつ認め

パズリーはパズリーで 彼女の研究成果が1つ認められ あと2つほど研究結果が認められたら

特例で王宮直属の魔法研究所で働く事ができそうになったとき

彼女の人生を左右する事件がおきたのだ。

ちょうど卒業まであと1年

実家から連絡があり 一時帰宅したとき

彼女は妹のセリーナがアレンのことを心底好きであることを初めて
しつたのだ

そして 失恋で半年ほど休学してしまった

そのことを 父であるセレスティな侯爵はパズリーを責めた

同時に どうして第2王子をおとせなかったんだ!!! と責めた
のだ

彼女はそのとき 初めて知つたのだ

魔力無しの自分がここまで侯爵家の娘として育てられたのは

アレンとものすごく近い関係だったから ゆくゆくアレンの妻に
なるだろうと

セレスティナ侯爵ブレアは　そうおもって　パズリーを育てていたのだ

ブレアは長年育ててきた実の娘にいった

「幸いにもお前は勉学に秀でている　セリーナが休んだ半年間分とクラスに追いつくまでの勉強を　お前は学校を休んで教えてやれいいな」

「お父様。　私の研究があと2つも認められれば特例として難関である王宮直属の魔法研究所に入れるのです。　学校を休むわけには・・・」

「セリーナは卒業と同時にそこに所属するとすでに決まっているお前にはない魔力のおかげでな
それに研究2つを1年ではむりだろう　わかったなら　さつさとセリーナのもとへいけ」

「研究の1つはもうほとんどおえて新しい研究もスムーズに進んでおり可能性はあります　お父様
お願いですから・・・」

「黙れ　そもそも　魔力なしのお前をここまで育てたのは第2王子の妻になるだろうとふんでのことだ
いまやその可能性はないしな　王子はいまいましいリール右大臣の娘と婚約をする一歩手前だ

もう　お前には用はない　セリーナが学校に追いついたらこの家をでていけ　わかったなら　さつさといけ　二度とお前の顔なんぞみたくもない。。　魔力無しの役立たずめが・・・」

パズリーは呆然とした　ただただ悲しかった

魔力無しの自分をここまで育ててくれた両親にすごく感謝して研究にも念がはいっていたし

学生ながらも結果もだしていたのに　この結末

余命宣告をうけたかのようにだった　特例として魔力なしの自分でも所属できるはずだった魔法研究所には入れず

パズリーは妹次第で１年以内には　もう王子と今までのようにはあえなくなってしまうだけではなく　セレスティナと名乗る事ができなくなるのだ

もはや　彼女には未来に希望はなかった

パズリーがただのパズリーとなるまで　あと数ヶ月。。。。

2 (後書き)

結構王道系の話だと思いますが おつきあってください。

プロット無しの私お得意の場当たり小説ですので 批判等は。o

r z

いいかんじの感想 や 次回の展開等の予想とかくださると わたくしめが大層よろこびます

父親の鼻屑目かとおもっていたセリーナの能力は親の鼻屑目どころかすばらしいものだった

14歳でこれほどはと

パズリーは関心してしまう

セリーナが優秀なのか それともパズリーの教え方がうまいのか

どちらなのか それとも両方なのか

半年間のブランクはたった2〜3ヶ月で元に戻ったのだ

いや 戻ったどころか セリーナの実力はあがっていた

クラスの成績も10番以内が当たり前だったのか

学校復帰の最初のテスト なんとトップだったのだ

これには ブレアも驚いたのか 満足した様子で

「お前が出て行く事はかわらんが 卒業まではこの家においてやるう

その後セレスティナと名乗る事も許さんし

お前はもう わしの子ではない いいな」

「はい お父様。 いえ セレスティナ侯爵様」

ブレアは満足した様子で部屋をでた

「パズリー やつと復帰かい？研究のほうは大丈夫なんだろうな？」

いつものごとく アレンはパズリーを気にかけて 久々の再会なのか ものすごく嬉しそうである

「ええ 研究は1つは終わって 教授達や研究所の魔法使いたちも認めてくれてるの あともう一つなの。でも 卒業前に終えるのか。。 研究自体はすばらしいものになっていつてるのだけどね

時間が足りないわ 私の将来がかかっているもの これから研究に没頭する毎日で アレンに会えない

日が当たり前になるかもしれないわ アレンは心配性だから 先にいっておくわ 私はいつでも大丈夫

だからね　なんたって大好きな研究を邪魔する病氣になんかに負けないもの　ワラ」

そういつて　アレンとパズリーは仲良く会話して

途中に

「パズリー姉様!!!　みて!私トップだったの!!!信じられないわ　これもすべて姉様のおかげ

ありがとう!!」

とパズリーにハグする妹

「君の妹は相変わらず元気だね。　あーあー　最近までは妹にパズリーをとられ　卒業までは研究にパ

ズリーをとられるんだ。。。　さみしいねえ」

「とか　王子様いつてますけど?姉様　ワラ　ケイト先輩はどうなるんでしょーねー?」

と失恋から立ち直っている妹セリーナはからかいつつアレンにつっこむ

内心アレンはひやひやものだ

なんせ　ケイトの恋人説は偽装なのだから。

大好きで大好きで仕方ないパズリーにやきもちをやかせるためもあ

るが

彼女が アレン自身のことを好きなことはみればわかるので

それに 小さい頃から一緒に育って 魔力無しと蔑まれていた彼女を守ってきたのは彼自身なのだ

彼女の気持ちがわからないはずがない

だから 彼はまっていたのだ

それが 間違いだとはしらずに ただただ まっていたのだ

彼女の口から 彼への思いをきけるのを。。。

嫉妬で やきもちをやいてくれるのを

「そうねー アレンは調子がいい人だから それに大丈夫よ ケイトは私とアレンの仲を真に理解しているし 何もかも大丈夫よ。」

そう 何もかも心配いらないのだ 卒業と同時に彼女はただのパズリーになり

妹のセリーナからも アレンからも すべての者から何も言わず離れていくのだから

貴族のなかでは 去る者追わずが当たり前なのだ

だれも パズリーのことなんか 気にしない

そう 気にしないのだ

卒業までの間 彼女は アレンにほとんどあわず

いや むしろ 彼女は学院すべての学友達とあうことをさけていた

みんなは 研究によつて 彼女の将来が決まるのをしっていたので
研究室の前にいろいろおすそわけなど おいていたり 応援して
いたのだ

それらの品をみるたび パズリーは申し訳なさど感謝の両極の2つ
の感情をもちあわせていた

そして 研究所入りの締め切りは卒業日の前日だったが

前日までに研究所に報告できなかったのだ

実の父親であるブレアの横入りのせいだ。。。

「アレン ごめんね 間に合わなかったの。 王宮では働く事できない」

泣きながら ただただ アレンに ごめんねと繰り返し伝えていた
「大丈夫だって 今からでも おそくても だそう！ そうさ 君
の研究結果はすばらしいものにき
まっているし まず 彼らは毎回君の研究レポートを楽しみにして
るんだよ？ たとえ締め切りがすぎ
ていたとしても 研究結果が大変すばらしすぎるものなら 締め切
りなんて 関係ないしょ 研究者な
んて しょせん 探究心の塊なんだから」

アレンはそう勇気づけ パズリーの報告書を片手にもち 王宮へと
「また明日な」の一言をのこしさっていった

パズリーは ただ アレンに ありがとう と 大好き・・・だっ
たよ

むりやり彼への想いをたちきろうとし すでにまとめた荷物を片手に
王国学院をさっていった 虹の街からでていったのだ

そして アレンとパズリーは数年は再会する事はなかった。

3 (後書き)

うまく文章にすることができない。

パズリーの旅

王国学院を卒業して

ただのパズリーとして生活しはじめて半年

今は虹の街 アベレスティンより遠く離れた小さな村で

孤児院の子供達の世話をしていた

珍しくも魔術の才能のある子に魔術をおしえたり

他の子たちには文字を教えたり

小さすぎ そして田舎すぎるせいで 大人も全員が

読み書きできるわけではないので そういった人たちにも

パズリーはオープンに教えていた

そして 夜は近くの飲食店で働かさせてもらって

「パズねーさま。みて！じょーずにかけたの！」

小さい子ならではの　なんというか　斬新な絵。

それでも　このこたちは　私に穏やかなときをくれる

侯爵家の人間としていたとき

自分がいかに　貧しい人生をおくっていたのか

今になって　ようやく知る事が出来た

アレンがいないと。。。　なんて思っていた自分があほらしく思う

今　こうして　アレンがいなくても　生活できているのだから

「そうね。　みんな　上手にかけたわね。　じゃーみんなで院長先生のところにもっていきましょっ
か！」

そうだった瞬間　院長が　ゲツと嫌な顔をしたが　それもそのはず

「「「「わーー」「」「」と

元気よく　院長のもとへ走っていったのだから

いや アタックしていった。。

一人ならともかく 数人まとめたのアタックは さすがの院長も。
ワラ

「パズリー 笑ってないで 助けなさい!!!」
院長にしては若い彼は パズリーに助けをもとめ

仕方ないですね と いいつつ 彼女は再び子供達の相手を

ここでは みんなが 優しく

最初から 若い 事情のありそうなパズリーを

何もいわず 受け入れて・・・

ここは 本当にあたたかい

いつもどこかに笑いがあつて

当分は ここで 生活するのも悪くないかな？

次の場所へ移動したら

今度は 何か新しい研究をしてみようかな？

研究するなら どこがいいんだろう。。。

学校で様々なことを学んだけど

一人の人間として 自分のために生き抜く事は 習わなかったな。。。

パズリーは 空を眺め

いや 未来を みていたのだろう

明るい未来を・・・

王宮にて

アレンは気が狂いそうだった。。。

王子の側近には 毎日のように 「パズリーは!？」ときき

なんの進展もなければ　口を噛み締め

セレスティナ侯爵が　今更。。。　結果もだしつつある彼女を勘当したのだ

そのことに　侯爵を恨み　無言の責めを・・・

自分の偽造彼女説がきつかけだったと。。。知れば

自分自身さえも恨み　後悔していた。。。　

彼女の遅れたレポートは今までにない最高だったのだ

王宮直属の魔法研究所に　いや　魔法は使えなくとも　魔法省にいられてもいいのではないか

とまで　あたまの固い連中どもにいわしめたのに

これで　今はまだむりでも　また　ずっと一緒にいられると思っていたのに

パズリーは　もう　虹の街アベレスティンにはいないのだ

王宮の自室から　虹の街　アベレスティンを眺めただ　つぶやいた

「僕は、、　また一人になってしまうのか？」

パズリーがない

裏切られたようが気がした

でも 彼女の事情を考えると 仕方ないのかもしれない

だから アレンは 待つ事にした。

迎えにいくのは怖いから

だから

彼は 彼女が もどってくることを ただただ 待っていた

アレンとパズリーがまた再び 一緒にあれることを信じて・・・

パズリーの旅（後書き）

会話がうまく かけない

もー ナレーションばっか・・・

こういうふうにいいたいのにと 自分の頭の中ではあっても
いざ 言葉にすると うまくかけなくて

文章能力もなければ 日本語能力も危うい。。。

パズリーの旅2

なんだかんだ この名のない小さな村に1年はいた

ここでの生活は パズリーという私自身のスタート地点で

生まれも育ちも虹の街アベレスティンだけど

でも この名のない村も 私の故郷の一つだと思う

ここで 学校では学べないものを学んだ

たとえば 人の温かさとか？ワラ

「パズ姉さま」

「パズリー」

みんなが私をよぶ声には ただ愛情が感じられて

それに 村長や狩りの主要メンバーが

私がそれなり戦えるとしたら

何度か私を狩りにつれだして

「おれたちはなー つかえるもんは使うんだ！

お前の腕 知識 どれもとっても役に立つ

なら 同じ村の民としてだなー・・・」

と毎回 そんなかんじで 一緒に狩りにいって

最初はうまくいかなかったものも

慣れてくると ウサギや鳥も簡単射止めることもでき

慣れるまで 吐き気に襲われていた 皮をはぎ取る作業も

いまじゃ おてのもの

一年前まで 貴族として生活していたのが うそのように
wild lifeに順応している。。。

魔力無しで 劣等感ばかり感じていた頃の生活が嘘のようだ

セレスティナとして生きていく事ができなかったとき
アレンとともにいる事がかなわないとしたとき
生きていけない そうおもったけど
ここでの生活が教えてくれた

私が私であることが一番大事なのだと
魔力なんて 関係ないってことを・・・

人によつて
場所によつて
生き方が違うのだ・・・

世界をみてみたい！

自分の知らない世界をみてみたい！

回ろつ。

世界をみてまわり

それらを いろんな場所にすむ 多種多様の人たちに教えよう！

自分のために

これからは 学んでいく！

自分のために

いきていこう。。。

「今までありがとうございました。ここでの生活で色々ふっきれました

そして 今は 自分の知らない世界をみてみたい！ だから
世界を旅して回ってみたいとおもいます」

「そうか アンタがそういうなら仕方ないね でも きをつけるんだよ

そして いつでも もどってきていいからね！」

「おばさま。。。」

「そうさ ここは もう あんたの村でもある！」

「おじさまも。。。」

やっぱり 村の人は温かい

涙をこらえて

「ありがとう」

つて・・・

そして

「いってきます」

別れをすませ パズリーは 新しい場所へと・・・

通称：異文化通り

結構おおきな街なのだが 長方形のように 縦にそった形をして
なおかつ シリアだけではなく 隣国や 様々な国
そして 様々な遊牧民たちが住んでいて 商業隊一行が通過する地
点ということだ

街ではなく 異文化通りという 少しかわった名前をしている

パズリーは今そこにいた

そして 人々の賑わいに驚いていた

すごい!!!

みんながイキイキしている!

貴族階級の あの死んだような瞳や 野望にみちた瞳

そういった 人の醜さが ここにはない!

「すごい。。。」

「あんた ここは初めてかい？」

自分で気づかないうちに 声をだしていたらしい

近くにいた ふっくらした 結構がたいのよろしい中年の女性が話
しかけてきた

「ええ ここよりずっと遠くの 小さな村にいて・・・」

「そうかい そうかい。昼はもう食べたかい？ おいしい店しっ
てんだ

一緒にたべないかい？ 一人より誰かと食べる飯のほうがうまいっ
てもんだ」

さあさあ とその女性は パズリーの手を持ち

一目 ぼろそうな定食屋に赴いた。。。

「ジジー 新客つれてきてやったよ？一品おまけしとくれ」

「ガハハハ お前さんは 小さい頃から かわらんのー」

「まあ いいじゃないか この子 ここには初めてなんだって え
っと 名前は・・・」

「パズリーです。」

「おいおい ジェシカ なんだ？自己紹介もしてなかったのか？？
ガハハハ」

「まあ いいじゃないか 腹が減っては戦は出来ぬだ！」

「まあいい パズリーといったか？ お前さんは 何食べたい？」

おじいさんは パズリーに訪ねるが 答える事ができない
看板みても 料理名がまったくわからないのだ・・・

「えっと・・・ きたばつかで その 恥ずかしい事に 料理名と
か わからなくて・・・」

「じゃあ あたしが決めるさ ラパに キイの実 スプーにアライ
サ」

「わかった どれも おまえさんの好物じゃないか ガハハハ い
いさいいさ

今日は おごつてやるさ 席でまっとれ。。。」

ラパ・・・ ウサギの肉で作った煮物

キイの実・・・ 赤い小さく丸い粒 果物

スプー・・・ シチューのようなもの

アライサ・・・ 食感がもつちりしているが見た目はさばさしてい
る米や麦ににたものを炒めたもの

パズリーは 初めて見る食べ物に 正直 なかなか箸をつけるき
はなれなかったが

美味しそうにたべるジェシカをみて 少しずつ食べ始めた

「おいしい。。。」

「だろうよ！ ジジーの作る飯はうまいからな」

ジジーの作るご飯がおいしいのか
それとも

誰かと一緒にゆったり食べるご飯がおいしいのか
パズリーにはわからなかったが

ただ ナイスな時間を過ごしたとそうおもった

「そういえば あんた 何してるのさ？ 手にタコがある・・・」

「ああ ペンだこです ワラ 学者（？）ですから」

剣ダコでもあるが ごまかした。。

「学があるのかい それはすごいな。。 そういや

あるドワーフが 大量の古書を庭でみつけたらしいで
今 学者にきて チエックしてもらいたいんだと

いくら 古からの民族でも なんか よめないらしい
学者なら 見てみる価値あるだろう？ 興味あるかい？」

古書！！？？？

古書なんて 滅多にみつかるものではない
だいたい古書は王族だけがみれるか

とか 知識の街 ライブアリアーへいかないといけない
パズリーは即答で

「あります つれていってください。。。」

・ と ジェシカにそのドワーフの住む家までつれていってもらった・

パズリーの旅2（後書き）

大魔法使いドルーいつでてるんだろう・・・　ワラ
とりあえず

パズリーが出戻るまでに　ドルーと出会うまでに
彼女には　いろんな経験をしてもらう！！

ので　まだまだ　恋愛にはほどとおいです。　。　すみません

偏屈ドワーフ

「おまえさん・・・ホントに学者か？」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

古書をみたいがためにドワーフのもとへつれていってもらったが
しょっぱなからにらみ合いが続く。。

にらみ合いたいわけじゃないけれど。。

両者の無言の応報が かれこれ 半刻はたった・・・

ような 気がする

ドワーフ相手には さすがのジェシカも無理なのか

「わたし これから用事あんだわ 悪いけど おいとまさせても
らうよ」

と早々に帰っていったのだ

これ以上 無駄な時間を過ごすのはよくない

腹をくくって 正直に話す事にした

なんせ ドワーフ

頑固者に頑固で勝負はただの時間の無駄だ・・・

「学者で・・・あると 自分ではそう思っています。」

「思うか。。。で 本当のところは？」

「ただのパズリーです」

本当だ

過去はどうであれ

今は ただのパズリーなのだから

「・・・」

「何か含みはありそうじゃが 仕方ない

古書をみたいとな？ おぬしに読めるのか？古代語が・・・」

「わかりません。でも 古書なんて なかなか拝めないものですから
学生時代に習った古代語や 密かに独学で学んだ文字などであればと
そうは思いますが。。。 駄目元で読ませてください

こんな 貴重な体験は早々できませんから

私は 今 いろんなことを知りたいんです」

「知りたいか。。。 時にはしらんでいいこともあるがな

まあいい 本は 奥においてある すきによむがいい。。。

いつでもきなさい」

「ありがとうございます」

奥の部屋の古書の膨大さに驚いた

「すごい。。。」

一冊ず片手にとって慣れない古代語を読もつとする

タイトルから 易しく書かれている物語や

全くわからない 難解なものもあった・・・ 絵からするに医学書だ
ろう

そして とある本を片手にとったとき
頭に膨大な情報が流れてきた

たくさんの絵 文字

人の思い

いわゆる 知識が頭に流れ込んできたのだ

そして

彼女はその本を片手に固まって

翌日 ドワーフに声をかけられるまで
意識を失ったままだった

ドワーフ視点

いつでもきなさい

とはいったが・・・

彼女の様子をみる限り

昨日からずっと 読み続けているような気がする・・・

いや 寝ているのか？

昨日 庭で発見された 例の古書がどれかを教えるのを忘れたが

パズリーは その本を持っていた

もっていたのだが

ドワーフは驚いた

自分がみたときには 見知らぬ言語でかかれていた本だったのに

今は その本には何も書かれていない

彼女は何かしたのか！？

いや でも 彼女は魔法は使えない

みればわかる

魔力なんて ないのだから・・・

では いったい？？

パズリー視点 b a c k

「あれ？ もしかして 寝てた？？？」

とつぶやくと

後ろから

「それはもう ぐっすりとな？ ワラ」

「あ・・・ すみません。。。」

で その古書が 庭で発見されたやつなんだが・・・」

と 何やら 濁した様子で 話しかけてくる

？と思い 古書を見てみると

何も書かれていないのだ

「あれ?? 昨日 本をあけたときは文字があつたのに・・・

万象の杖って・・・ え? あれ? なんで?」

彼女は読めなかったはずなのに 今は理解している

その自分の様子に 困惑した・・・

そして ドワーフはドワーフで

万象の杖

という言葉に驚いてしまった

「お前さんは しておるか? 万象の杖の話を・・・」

「いいえ。聞いた事はないです」

そう パズリーがいうと 万象の杖の話を始めた

偏屈ドワーフ（後書き）

すいません

なんか 話がどんどん チート主人公になっていく気がする。。。自分としては 早く王宮に 王子のもとへ 主人公を出戻りさせたいんですが

パズリーの一人旅は まだまだ 続きます！

あと 少ししたら大魔法使いドルーがでてくる！

万象の杖とドルー

それは昔

どれくらい昔なの？

そうじゃな この国が国として動くより ずっと何百年も昔じゃ
ろう？

そんなに 昔のことなのに ばば様はしっておられるの？

ほほ ばば様は なーんでも しっておる

すごいね！

ばば様に知らない事はないんじゃないよ
今日は 万象の杖の話をしてやろう

万象の杖？なあに？

万象の杖はのう。 ばば様のように なんでもしっておるのじゃ

なんでも？

そう そしてのう ばば様でもきんことをも出来る 神様の杖じゃ

神様？

神様って 本当にいるの？

ほっほっほっほ　そうじゃなー

今は魔法もあるが　魔法はな神様がわしらに与えてくれたギフトじや。

そうなの？

そうさ　神様は昔　わしらと一緒に過ごしておられたんじゃないぞ？

でものお　わしらは　馬鹿で　利益ばかりもとめたせいで　神様は怒ったのじゃ

それはもう　大層お怒りになったの・・・

それを助けてくれたのが　精霊様じゃ。

精霊様　精霊の王様が神様に一言そえてくださったおかげで

わしらは　今も魔法とともに生きておる

なんていったの？精霊の王様は。。。。

それは　精霊様と神様だけの秘密じゃ　ほっほっほっほ

でものお　わしらは知っておる　その秘密は　万象の杖に記されておると

ばば様　よくわかんない

一言でいうと 万象の杖は 精霊様が作り上げたもので

万象の杖を継承し者は 精霊様の力をかりて 神様をお願いを一つできる

そうなの！？なんでもかなえてくれるの？ 僕ほしーな

ほっほっほ 精霊様の愛し子のみが継承できるのじゃ

つまり 愛し子は欲のない者じゃから おぬしは万象の杖を得られないのー

なんだー つまーんない でも それって本当にあるの？

それは わしにもわからん 精霊様の気まぐれじゃからの

本当にそれが実在するかは わしにもわからんのじゃ

ただのー 万象の杖は 継承者を幸せにするとは限らん。

むしろ 周りの欲深い人によって 継承者は不幸になっていく

だから 継承者は 決して 自分が万象の杖のマスターだとはいわん。

神様が何でも願い事をかなえてくれるのに？不幸になっちゃうの？

そうじゃ。 だから 万象の杖は 一部で 不幸の鍵ともよばれておる

へんなの。

そうじゃな へんじゃなー でもな ドルー

おまえはさんは 莫大な魔力の持ち主じゃ

そして その力をほつする者達に あーだーこーだと 色々される
だろう

それが いい意味でも悪い意味でもじゃ

大きくなったら わかる。

ドルーや。 おぬしのその魔力は 万象の杖の保持者を守るために
あるのだろう

そうなの？

ばば様はそう信じておる いつか現れるであろう 杖の保持者を守
ってやるのじゃ

守るって 何から？ だって神様は何でも願いごとかなえて
くれるんでしょう？

そうじゃな でも 杖の保持者はな きつと？ー？？？

え？ なに ばば様 きこ？ー？？

ドルーや 杖の保持者は 現れる その者をみつけ？ー？？ー

きこえないよ ばばさま

「きこえないよ ばば様！」

一人の青年は 勢い良く起き上がった
手のひらで顔を抑え つぶやいた

「万象の杖か・・・どうして 今頃になって」

コンコン

「ドルー様 お時間でございます 王宮へ出仕なさってくださいまし」

ドアから メイドの声がきこえる

万象の杖のことを 頭の隅におき 仕事の準備をし

王宮へむかう

馬車のなかで 彼はとある学生の論文を読み直していた

何度よんでも この学生の論文は素晴らしい

「パズリー・パレスティナか・・・ 一度あつてみたいな・・・」

たしか アレン王子の学友だっけな？

いったら あわしてくれんだろうか？

大魔法使いドルーは 馬車の窓から空を眺め つぶやいた

「あつてみたいな・・・」

万象の杖 と ドルー（後書き）

むりやり ドルー登場させました！

これかきはじめたときと 話の流れがどんどん違ってきてる

ま いきあたりばったりの話だから 仕方ないよね ワラ

ドルー

カツカツカツ

テクテクテクテク

「お師匠様」

「・・・・・・・・。」

ドルーは腹が立っていた

パズリー・パレスティナが魔法研究所に入所していないければ
侯爵の娘でもなくなったことを 先ほど知ったからだ

カツカツカツ

テクテクテク

「お師匠様！！まってください お師匠様ってば」

「……。」

「もー ドルー様！！ お待ちを！」

小さな少年の悲痛な叫び いや 呼び声に

諦めて少年にふりむくドルー

「なに？エル」

「何？じゃ ありませんよ。なんですか これは！」

と エルと呼ばれた少年がだしたのは

辞表

「何って 辞表だよ」

「ええ ただの辞表ならいいですよ

でも 大魔法使いが研究所やめるって！！！ 王がお許しになり
ませんよ！

あなたは もう この国の一種の顔なのですから！ おわかりです

か？」

「いやー だってー ちょっと 幻滅しちゃったんだよね」

「何ですか」

「聞かなくてもわかってるでしょ？」

「それはね わかってますよ 何度も何度も愛読書のようによんでいたとある学生の論文のことですよ

それをかいた学生のことですよ 言わなくても知っています

アレン王子も 色々力をつくしているじゃないですか！」

「とはいってもね」

「とりあえず あなたの辞表に関しては王族の方の許可がいります」

「えー。 面倒。まー いいや 数日以内に謁見許可とりつけといてよ！」

と軽くドルーはいうが

「軽く言いますけどね・・・王族の方々も忙しいのですよ

それに 内容が内容ですから 数日以内なんて 無理ですね

天と地がひっくり返ったとしても起こりえないです」

「ふうん。。。そっか・・・」

ドルーは考えるように 自分の研究室に足をすすめた

少年は その後ろ姿をみて

「嫌な予感がする・・・」

誰もいない廊下で つぶやいた

そして その予感が的中することになる・・・

エルへ。

なんていうか やる気なくなっちゃったんで

旅にでます♪

見聞録！ついでに 杖の保持者を探してみよう！

あと パズリー・パレスティナにもあいについてみよーってことで

あとはよろしく！

ドル

「お師匠様。。。あなた

もとから やる気なんてもってなかったでしょう！！！！ 涙

あーーーー もう！ 王様になんて報告すればいいんだ！！！」

そして 2枚めの置き手紙に エルは大層頭を悩ます事になる

そうそう

王様がうるさかった 魔力譲渡のことだけど

杖の保持者が見つかり次第実行したいとおもいまーす

よろしく！

僕 王族関係の人に譲渡したくないからさー 言い訳よろしく
ねん

ドルー（後書き）

ドルー視点で・・・

何も考えず 更新しようと思って

まだ ドルーとパズリーは遭遇しません・・・

とりあえず パズリー視点にもどりたいとおもいます！

感想とか くれたりすると 嬉しいです

でも それよりも よんでくれてありがとうございます

精霊使い（前書き）

すいませーん

話 一気にとびます。。。。

精霊使い

万象の杖という本とであっていい

パズリーは いろんな街や村 山の中 谷の中

たくさんの場所に訪れた

そして 今 彼女は一人ではない。

アベレスティンをでて
3年たって

彼女は とある湖で 水の精霊を認識した。

精霊が実在すると身を以て体験したのだ。

しかし、万象の杖が彼女におしえたこと

精霊の力は 魔法を使うものより 高貴であること

かろうじて 王族は精霊のことを知っているが 契約しものはいないこと

精霊は精霊で、人間の欲に嫌気がさしていること

つまりは 精霊が見える事をむやみに言い回るべきではないということ
を彼女はしっていた

だから パズリーは 認識しても 存在しないものとして扱った

でも とある精霊フィルは いつもパズリーのそばにいて

いつしか パズリーはフィルがいるのがあたりまえと思うようになり

盟約なんて契つてはないけど

パートナーのようなものになった・・・

フィルはなんでもしっていて

パズリーのことを大切におもっていて

パズリーにとって フィルは家族のようなものだった

アベレスティンをでて5年たった今

パズリーの横には いつも フィルがいた

（パズは寂しいとは思った事ないのか？家族と好きな人と決別したこと）

「なあに？いきなり・・・それはもう一言でいうと絶望したわ

未来に価値をみいだせなかった。あの場所を離れてから

ふっきれたとおもってた ううん ふっきたと思ってただけど

じっさい そうじゃなかった。いろんなことがあって・・・

正直ね 今でも なんで 魔力がなかったんだろうつて思うときがある

魔力があつたらつて・・・

でもね フィルのおかげで 少しずつ 過去とさよならできていくの

これも 精霊様の力のおかげね♪ ようやく自信がもてるようになったわ

ほんと 私 フィルと出会えてよかった」

（私もだ。パズのそばは居心地がいい・・・）

「ふふ ありがとう」

（パズは この街ですつと生きるのか？）

「バルテン王国でつてこと？ たぶんね。ここは精霊もちにも

魔力無しにも 優しい国だもの。ふふ 旦那様みつけて 子供つくらなきゃね」

（子供か。。。）

「あらやだ なぁに？嫉妬？ワラ」

（そういうことではない）

「冗談よ。 まだ 子供はね。 アレンを忘れた と思っていても やっぱりね・・・すべてだったから 当分ないわね 苦笑」

（パズ。。。）

「ねえ フィル。 私 幸せになれるかしら？」

（わからぬ。 が、 パズには幸せになってほしい）

「もうー そこは 嘘でもいいから肯定してほしかったわ」

（すまぬな。）

「ふふ。 そろそろ 青空教室の時間ね ワラ いてくるね フイル。」

（ああ）

彼女の運命は暁のなか。

じきに 嵐のなかへ 舞い戻る

「あれ？ あの子は……もしかして……」

精霊使い（後書き）

プロットなし 何度もいますが 場当たり小説です
きほん1話を一気にしあげます
が

今回 更新だけを早めよう！っておもって
内容0で すみません

それでも よんでくれている皆様に 感謝です。
随時感想受け付けてます！ しつこいってね 苦笑

振り返る日までのカウントダウンが始まった日。

「ねえ、君はいつからここで教えているの？」

パズリーは ふと聞こえた声に顔をあげた・・・

そして 驚いた

なぜなら そこには 大魔法使いドルーがいたのだから・・・

パズリーが彼を知らないはずがない

彼女が一時期目指していた研究所を設立したのが彼だったのだ

しかし なぜここに彼がいるのだろうか？

疑問に思う。

（どうして？大魔法使いである彼は国からなかなかでれない存在だったはず・・・）

「聞こえてる？」

ドルーのもう一度の問いに慌てながらもパズリーは答えた

「えっ あ はい。聞こえてます。教え始めたのはつい最近です。

ほんの少し前にこちらに移ってきましたので・・・」

「そう。さつきから聞いてたけど 君 教え方上手いね。どこで学を？」

「あつ えつと・・・ どこでしたっけ？」

数年前から 私は自分がパズリーであるということしか言えなくなつてしまいました。

でも知識はあるから 自分探しの旅の道中 こうやって 教えていたりするんです」

「あー 記憶でも失ったの？ なんかわけありとか？ というかパズリーっていうんだ

僕が探してる人と同じ名前だね。ねー 知ってる？パズリーパレスティナ。」

ドルーの口から 自分の名前がでてきたことに驚いたが

それを顔にだしたのは一瞬のこと。すぐに平素にもどり

「きいたことあります。一度 彼女の論文を読みました。学生なのに評価された そう聞いています」

そう 自分で確かめた事はないが 研究所でかなり評価されていると アレンがいつていたのは思い出す

「そうなんだよ！ もー ほんと 彼女が僕のところにきてくれる

ように打診しておいたのに

王子や侯爵たちが複雑に悪い方に絡んで 今じゃ 彼女は 雲の上さ。

どこにいるんだか・・・」

パズリーは驚いた 大魔法使いドルーが自分のことを認めていた
そういつていたのだから

たとえ過去の自分の功績だとしても 嬉しい。。。。

しかし 嬉しさを表にだすわけにはいかない・・・。

冷静さとりもどしつつも

「そうなんですか。 もしかしたら 彼女の実家付近にいるんじゃないんでしょうか？」

ほら よくいうじゃないですか 灯台もとぐらして。 案外 近くにいるんじゃないでしょうか？」

「だったら 王子がかわいそうだね 近くにいるのに 何年もあえていないんだから

それが真実なら 傑作だね。 腹がよじれちゃうなー きっと。」

「あの どういう意味ですか？」

「あれ？ 有名な話なんだけど 知らない？ 知らないならいいや。」

ところで 君さ なんか 研究とかしてないの？」

ドルーは確信していた この少女は優秀だと

だから もし 研究とかしているのなら それは 素晴らしいもの
だろうと

「あー お見せできるほどじゃないですが いくつか・・・」

「内容は？」

パズリーは言うか迷ったが きっと ドルーは信じるに値する人だ
と思い

正直にいった

「精霊に関してです」

ドルーはかなり驚き そして 少しずつ興奮しはじめた

なぜなら 精霊のことは ごくわずかな人しか しりえないことだ
ったから

当たりだ

何が当たりだなんて わからない

ただ ドルーは 思った

（この子だ・・・）

彼女が万象の杖を所持しているかはわからない

しかし きつと このこしかありえないだろう

魔力譲渡は この子しかありえない

理由なんてない

ただただ 彼は 確信していた

そして 彼女が精霊に関して何を研究していたのか

レポートにしてもらったものをよんで

自分の直感が正しかったのだと

ドルーは歓喜に震えた

（おば様 見つけたよ 彼女は万象の杖を所持している

彼女が 僕の守るべき対象だ・・・）

そして このひ

ドルーが 守るべき対象の万象の杖の所持者を発見してから

そう パズリーの望む平穏な生活はじょじょに離れていき

とある何の変哲もないはれた日に

ドルーを迎えにきたアベレスティンからの使者によって

パズリーは 昔自分がいた場所に 返り咲くことになってしまった・
・

振り返る日までのカウントダウンが始まった日。（後書き）

久々の更新です

自分がどんな話にしていったのかもうわかりません。

今まで以上に矛盾一杯になってくるとおもいますが

それでも なんとか大丈夫と思いながら読んでくれるとありがたいです

こういうとき プロットとかあったら っておもっけど

書きながら話をすすめるのが 好きな私にとって 難しい

とりあえず 結構適当すぎますが そのうち 書き直すかもですが
あたたかく見守ってくださいと ありがたいです。

嫌な夢。

いやだ

いやだいやだ

いやだいやだいやだ

やめて

おねがいだから

ほおっておいて

ねえ

おねがいだから

やだ

やだやだやだ

いや。

どうして？

なんで？ドルー　なんで！？

（僕は君を守るよ　大丈夫だから）

いやよ いきたくない。

（大丈夫 僕を信じて）

そっちには いきたくないの

やめて

そこに私の場所なんてないの

（僕がいつも君のそばにいるよ？）

行かしてよ

（それでも駄目なの？）

ここから だしてよ！

（ねえ パズリー）

いやよ お願い ドルー どうして！

（ねえ パズリー あっちをみてごらんよ そう君の後ろ）

？

うそ・・・

(どうした？パズリー そんな横にくびをふって。。。)

どうして あなたが そこにいるの？

(どうしって？って ここは僕の城だよ 僕がいても何の不思議もない なぁドルー)

(そうですな王子。)

うそ。ドルー あなた ここは あなたの家だって・・・

(さすがの僕でも ここは無理だよ 外をみて気づかなかった？)

ううう。 どうして・・・

(パズ 君は さっきから どうして？とか そればっか やつと君に再び会えたのに 喜んでくれないのか？)

王太子殿下・・・

(よしてくれ 昔のように アレンと呼んでくれ)

(そうだよ パズリー この馬鹿王子は ずっと 君の事をまっぴらから 何も心配することはないんだよ？)

ううん・・・ それでも もう昔みたいに呼ぶ事は出来ない

(どうしてもか？)

うん ごめんなさい。 私たち すむ世界が違うの

((認めないよ？パズ 昔からきまってたんだ 君は俺の横だって)
(

ごめんなさい もう 昔の私とは違うの

((聞こえない 俺は何も聞こえないよ そうだろ ドルー？)(

(王子。。。)

((そうさ 俺のパズが そんなことを言うわけじゃないじゃないか
パズ おいで)(

殿下

((そうじゃない アレンだ！！！！)(

・・・。

((パズ お願いだ！ そうじゃないと 俺・・・)(

それでも 今の私は昔の私と違うの

あの日 ここをさった日から 私は ただのパズリーなの。

ごめんね

アレンの横にずっといれないこと

ここから さつていくこと 許してね

アレン・・・

（（パズ・・・））

・・・

（（・・・いよ。許さないよ そんなこと。絶対に 二度と手放すものか））

え？

痛いよ 痛いつて 手離して？

（（離すとまた俺のもとからいなくなるんだろ？））

そうじゃないわ ただ 本来あるべき・・・

（（本来あるべきは 君は俺の隣にいることだ そうだろ？ くるんだ・・・

さあ そんな 顔したって駄目だよ 大丈夫 痛いのは今だけだから さあ

俺たちの部屋にいこう な？ パズ・・・ ずっと いえなかったけど

愛してるよ そうさ 変な意地はらず さいしょから いておけばよかったんだ

いや でもいいさ パズ 君は もう 俺のものなんだから・・・

ちがう

やめて

離して！

ドルー 助けてよ

（他の男の名前なんて呼ぶな）

（ふふ 王子の嫉妬）

うそ

いやよ

そっちには いきたくないの

やめてよ

いや

いやよ

止まって

「イヤ――――？――？――？――？――？――？――？」

はあはあはあ

「あれは 夢？

お願い 夢であつて・・・」

夢をみた

暗いくらい夢をみた

暗闇のなかに 私はいた

暗闇の中にいたのに 何かにおわれているような錯覚がした・・・

あれは 夢？

それとも 現実？

いや 現実じゃないわ アレンは・・・

でも ドルーと出会った ありえないこととは言い切れない

何か 私の意にそぐわない事でも起きるといふの？

杖の保持者は たまに未来にちかい予知をみるという

もし そうなら

これは 現実？

あの場に あの地獄に再び足をふみいれるといふの？

そんなことないわ そうよ

私は

ただの パズリーなんだもの

大丈夫

そう きっと 大丈夫よ

私はひとりじゃないもの

フィルがいるもの

大丈夫・・・

これは悪夢 ただの嫌な夢よ

本当に、それは夢？

嫌な夢。(後書き)

プロット無しの土壇場劇場 イエーイ

アメリカ時間深夜4時前

寝れず なんか ネガティブになっていて そうしたら こんなお話
ハッピーエンドを目指したい
が

バッドエンドも捨てがたい というか 暗い話にしたいのよ！
とかおもいつつ 本当 適当です

今回は 今まで以上に ただの思った事を 頭の中のイメージは
こんなんだ！

を ただ思うがママにかいた結果です
さぞ 読みにくい事でしょう 申し訳ないです
が 自分の文章能力は壊滅なので 今後も文章にかんしては期待し
ないでください
では。

蝶

影の組織はいろんなところに存在する。

王族のためにある彼らを蝶とよぶ

世の中を ひらりひらり ゆらりと のらりくらり すべてのものをかわし

流れるようにいきっていくものたち。

蝶は王族。一度の失敗で華麗に消えて行く王のよう

蛾は貴族。薄汚れた道を歩んでもしぶとく生きる貴族のよう

幼虫は平民。可能性を秘めていても才能を咲かすには険しい道にいる平民のよう

アレンは思う

パズリーは貴族で、そして王族にもっともちかい存在になる予定だった

そう つまり さなぎだ。

幼虫でもなく、蛾になるかも蝶になるかも わからないはずだった

時がすぎた今

彼女は 何になったのだろうか？

蛾になれていないなら 何に？

ずっと さなぎのままなのか？

「そしたら 迎えに行けば 蛾にならず蝶になるのか？」

「は？」

王子のもらす言葉に 影は首を傾げる。

「いや すまない。 おまえたち蝶は私たち王族のものだ。 いや モノといったては言葉がわるいが

王族のためにしか っていう意味だ」

「それは 承知しております」

「蝶が王族のものになるのなら 蛾になりきれなかったパズリーは今やさなぎのままだろう？ そうおもったら 今からでも間に合うのではないかと思ってね・・・どう思う？」

「殿下。私たち蝶は 仕事ゆえ 恋愛というものを人生から外す考えを うえつけておりますゆえ 何もいえませんが ただ 人生に何事も遅いも早いもありなく 今だ！ と思えば それがベストな時期なのです。 ゆえに 今殿下が動かれるならば 今動かねば手遅れになるやもしれません」

影はいう。

今が時なのだと

「そうか。 つまり お前達は パズリーをみつけたのだな？」

「はい。 ただいま 使いのものを差し向けておりますが・・・」

「なんだ？」

「隣の大国の田舎でアカデミーなるものを作られておるようです
して

あちらの宰相の目にとまったようで・・・」

「あとで使者をおくろう あのためきは私のことをよくしっておるからな」

「それと、大魔法使いドルーのもとにおられるようで・・・」

「逃すな。 宰相のもとへ行く前に つれてこい。」

「yes your highness . 仰せのままに」

「いや・・・ その地に留まらせておけ 私自身がいこう。」

「御意に」

パズリー

君は また 私の横で笑ってくれるんだろうか？

それとも いや

信じてるよ

だから 早く 私のもとに戻ってきてね

でないと もう 狂ってしまいそうだよ

こんな状況に追い込んだ原因をすべて壊してしまいそうだ

だから そうなる前に

パズリー 待ってるよ

いや

迎えに行くよ。

君は

さなぎのまま死んでいくのではなく

蛾にもならず

蝶になるんだ

私だけの蝶に。

「迎えに行く前に 掃除しなきゃね。 そう 蝶の住まいはキレイ
じゃないといけない」

蝶（後書き）

何がかきたいのか わからないまま うpします

ひさびさのうp です 学校が忙しく 体調も崩していて ええ
久々なのに 適当になってしまい 申し訳ないです
どういう展開にしていこうか どう話を進めようか ひらめかなく
て お気に入り登録してくださっているかたがたには ご迷惑お
かけします

隣国バルテン。

大魔法使いドルーとの出会いから パズリーはめまぐるしい生活を送っていた

ここバルテンは 豊で交通設備も整っていて貿易も盛ん。

騎士たちの能力も高く、また別の集団 王族や貴族のための騎士の集団ではない平民による平民達のための集団 いわゆるギルド、通称：ナイト。 ナイトもまた王族騎士たちにひけをとらないほど統率されており 個々の能力も平均して高い。

魔法がシリア王国とは比べ 重大視されてはおらず 使えるものもいるがアカデミーのようなものはない。魔法を使えるものは もちろんいるが、 彼らはたいてい弟子入りして ようやく魔法を扱えるようになるのだ

それに 王都ではそうではないが 田舎になると 潤って入るが識字率がそこまでたかくない。 いや 読めるが書くとなると微妙だったり・・・

リタラシーや魔法に関して宰相は不満なのだ。

だから 学校を作ろうと案をだしたが これがウマく進まない。宰相自身数少ない留学経験者だ。 色々な情報を有しているが一人では何もできない。

バルテンの王宮を牛耳っているといっても過言ではないお方、

バルテンの宰相は 総合アカデミーを作る事に関して頭を悩ませていた

アベレスティンのアレンとは友人だが とある少女をみつ付けてくれるまでは協力しないといっている

まったくもって いまいましい。これは外交だぞ！？

と宰相ルーカスは何度おもったことだろうか・・・

この人 宰相ルーカスは 牛耳っているとは言われているが実際はただの苦勞人

彼の祈りを神はうけとったのか ようやく 魔法アカデミーの案件が進もうとしているのだ。

（ようやくバルテンは完璧というにふさわしい国へと進みだすのだ！ついに時はきた）

と 喜んだのは一瞬。

協力者にと協力をあおいだのは なんと 例のパズリー・パレスティナだったのだ！

心優しい彼女は 協力してくれるといってくれた

が、

やはり ルーカスは苦勞人。 神はそのことを忘れなかった

パズリーが都にくる前日には アレンのところから使者が送られ協力してくれるというパズリーを迎えにくるこのことで

つまりは 彼女の協力は無いに等しい。

噂にきく あの秀才の手を借りる事ができない・・・

（なぜだ！ようやくスタートするはずだったのに また延期だ！
！！ いやアレンから話はきいていたから ここは友人としてパズリーとやらを快く送るべきなんだろうが いや かし・・・）

。。。

友人であるアレンは 曲がりなりにも シリア王国の現王だ。それに友人でもあり

また彼の恋についてはよーーーーーく知っている。

必然的に 自分の野望である アカデミーを諦めなければならない・
・

そこにはルーカスの涙なくして語れない裏事情が確かにあった。。

着々と パズリーはかつて彼女が住んでいた場所へ舞い戻るはめになっ
ていったのだ。

隣国バルテン。（後書き）

短くて申し訳ないです。もっとバルテンについて書こうとおもったんですが 思いつかず。。。

ドルーのレクチャー 夢想形式？

ね、パズ？どうやって魔法をつかえるようになるか知ってる？

パズリーです。自分の内にある魔力を用いて 魔法を生み出す

そうパズ。正解。魔法を生み出すんだ！ でも 生み出すのは簡単ではない

その魔法にたいしての正しい知識 そしてその魔法をうみだすためのそれ相応の対価として十分な魔力
そして 何よりもイメージが大事なんだ

だからパズリーです。知識としては知っています

ああ らしいね。君は何でも知っている。まるでとある杖を所有しているようだ。では 古代魔法について何か知っているかい？古代魔法はね 今の魔法とは全然違う 古代魔法に現代魔法は足下にも及ばない。 なぜかわかるかい？

いにしえの契約がないからですか？

ははは 学校ではそう教えているらしい。実際はいにしえの契約なんてない

ただ お願いするだけなんだ

お願い？

そう セイレイ様にさ

え？

神や悪魔たちは私たちに力をかしてくれている そう語り継がれて
いるだろうが

実際は違う ただ教えているだけだ 魔法の呪文とかをね

それも 一応力をかしてくれているのでは？

ああ そうだね それもそうだ でも 僕のいいたいのは 違う
彼らは何もしていない

精霊とちがつてね 精霊達は 精霊の力をつかわせてあげていたんだ
たとえば 干ばつのひどい地域には水がどうしても必要だ

今は ただ 水の魔法をつかって その場その場で補充するという
手段がとられている

が 精霊の力をかりるということは その場のぎではないという
ことだ

たとえ 精霊の力をかりた人がその場から離れても その場にいる
人たちが精霊達に感謝をわすれず

尊敬しつづけたら 精霊が怒りを覚える以外に そこはもう干ばつ
の地域ではなくなるということ

万物の調整もしなきゃいけないから 精霊使いはその辺をちゃんと
かんがえなきゃいけないのが 難だけれど

いわゆる 世界をかえる力をもったことになる

精霊王は愛し子の願いを たとえ それが世界を破滅へと導くもの
でも

かなえてやろうとし 力を貸すだろう。

だから 精霊の力は 未恐ろしくもあるんだ

むかしは まだ精霊に尊敬していたころは 契約者がいた
契約者と呼ばれるものたちは 精霊の力をかりて
そして また 自分自身の魔力をまぜ 魔法を
今で言う いわゆる古代魔法を使用していたんだ
魔法使いと精霊との契約が いわゆる いにしへの契約
ぶっちゃけ そんなおおそれたものじゃないんだ だれにでもでき
たものさ 魔力があればね
そして今 古代魔法を使える人間が僕だけなのは その契約のこと
をしらないせいでもあれば
精霊のこと自体がうけつがれていないせい
誰も 精霊をしんじていないなら 尊敬もしていないからね
だって そこに確かにいるのに 視えないのだから・・・
だから みんな つかえない

僕は ただ膨大すぎる魔力保持者で 精霊を信じていて尊敬もして
いてる

けど精霊の加護をうけていないんだよね。

多少の古代魔法をつかえても

それは 実は、ほんの少しの精霊の力と僕の膨大な魔力が そこそ
こすごくさせているだけ

えっと・・・精霊の加護があると魔力が少なくても
すごいということですか？

そう。加護持ちは魔力なくても精霊魔法という魔法を使える。魔法
とっていいのかわからないけどね。今は誰も知らない事なんだ
けどね、古代魔法は現代魔法よりすごいと言われているけど
精霊魔法は 古代魔法よりもっとすごいものなんだよね。

そんなにすごいんですか？

ああ すごいさ。加護持ちの精霊魔法は。僕だって 知識としてし
か知らない。

だけど 加護持ちはきつといばらの道を進んでいるに違いない。

どうしてそう思うんですか？

君も知ってんじゃないかなー？ 僕の膨大すぎる魔力。

風の噂で。魔力なしだったから一応しています

はは 僕と反対だな。正直、すぎた力は自分をも壊す。もっていて得はあっても損ばかりさ

でも今のあなたがいるのはきつとその魔力のおかげでしょう？

まー そうだね。でも やつと魔力譲渡をできるようになったんだただ人になるために 譲渡者をさがす旅にでてるんだよ。そして君にであい 君は魔力譲渡にふさわしい人だ。 どうする？君は 力を望むかい？

そう 君は望まないかもしれな

しかし 神は乗り越えられる試練しか人にあたえないのだ
今がその試練のスタートだ どうする？

ドルーがそういった瞬間 今まで感じられなかった何かが自分の中にあることをかんじた

パズリーは思う

どうして 今なのだろうと

どうして 私なのだろうと

どうして？

万象の杖はたくさんの知識を与えてくれた

自信を、

自由も、

友人である精霊も

たくさんものを与えてくれた

しかし

魔力だけは与えてくれなかった

杖が指し示さなかった道を どう進めばいいのだろうか。

ドルーと逃亡（前書き）

更新遅くなりました

プロットなしは やはり厳しいですね。

そのうち 構想組み立てしっかりしたいなと おもってます。

ドルーと逃亡

「ねえ　ドルー。そのルーカスという宰相に会いに行っているのよね？」

バルテンの都市に　宰相が働いている王宮にむかっていたはずだった青空教室が認められ　国単位の規模で動かすプロジェクトに貢献するために

しかし　ドルーが向かっているのは都市とは正反対の方向
むしろ　港へむかっているようだ

「そうだよー。でも　ほら　僕って有名人でしょう？　この前　追っ手にみつかって」

「追っ手！???」

「そー。シリア王国の　なんていうのー？　追跡隊というか　僕の捕獲？勝手に抜け出してきちゃったんだよねー　パズリー・セレスティナにあいたくてー　はは。でも　まだ僕の目的の一つが果たされてないわけだからー　追っ手をまかないといけなくてー　ごめんねー　パズ。」

「パズリーです。いい加減覚えてください。　　というかはやく王宮にもどってくださいよ　あの国には　あなたをまっている人が大勢いるでしょう？」

そうだ　この人は　曲がりなりにも大魔法使いだ。誰もが懂れているそして　この人の考えに　理論に　誰もが魅入っているのだ

そんな人が　長い間　あの国をでるなんて。

「いやいや　パズ。　パズリー・セレスティナにあいたいがためにでてきたんだよ！？まだあえてないんだよ　諦めれると思う？　むりー　じゃ　というわけで　いったん　バルテンでましようか。」

「なんでそうなるんですか。私　宰相にプロジェクトの貢献を約束したんです。さっさとみつかって一人で帰還してください

あるいは、せめて　自分の考えたプロジェクトの計画などを宰相に

送らせてください。」

「えー ルーカスのハゲに そんなに丁寧なくていいよー 困らせてたのしもー」

「いやいや それ 人としてどうなんです？ だめですよ 苦労人だと風の噂でできますし 少しは何か助けになることをしないと」

パズリーは必死に説得する

「まー いいけどー1日ね。1日で仕上げて。それ無理矢理魔法で転送させるから。」

きつとあのハゲ宰相 泣いて喜ぶよ。 よかったね。 たぶん 対面したときに めちゃくちゃ感激した様子で挨拶しそうだよね。 想像しただけで 笑えるよー。」

「ドルーって 思ったよりいじわるな方なんですネ」

パズリーはそう会話をしめくくり 案件に取り組む。

バルテンの国の事情や 性格 自分のしっている情報をもとに アカデミーの基礎となるものを考えまとめていった。

わかりやすく、ルーカスが簡単に理解できるものを。

そして それはバルテンの未来に大きく貢献し

遠くもない未来に パズリーを苦しめる要素の一つにもなる。

ドルーとパズリーは 誰にもみつからずにバルテンを出国した。

シリア王国のとある一室で 一人の男は目の前でにこやかに笑う男に畏怖を感じていた

「なーセレスティナ侯爵。あなたの娘 いや元娘だったね。パズリーがようやく僕のもとに戻ってくるんだ。もうすぐ戴冠式だろう？僕の妻としてお披露目するには絶好の機会だと思うんだ。いくらもう家族じゃないとはいえ 仮にも元父親なんだ 君は、セレスティナ侯爵はもちろん僕に協力してくれるよね？

.

もちろん 否だなんて言わないよね？お義父様とでもよんだほうがいいのかな？はは

侯爵 期待してるよ？」

ただただ目の前に座る男が怖かった。

自分の半分も生きていない若造が と言えないほど恐ろしく感じた自分の犯した罪 どれほどおきなものだったのか 今改めて認識した

いくら勘当したとはいえ パズリーは自分の娘には違いない

そして 今後のセレスティナ家の命運を握る彼女に

男は何をすればいいのか わからなかった。

昔のように傲慢にはふるまえない。

そんなことをすれば 目の前の男が 時期王となるこの男がだまっ
ていないだろう

自分の見誤った判断のせいで

男は窮地にたたされていた

男の答えをまつているかのように にこにこ穏やかな顔をしてセレスティナ侯爵をみつめる若い男時期王となるアレンに

侯爵は声をふりしぼり

「殿下の御心のままに。」

自分の意とは反する答えを アレンに伝え その部屋を退出した

「はは。 あははは パズ。 もうそろそろ 王宮の掃除が終わるんだ。
君の元父 侯爵が思ったよりがんばってくれたよ。 もうすぐ君に
あえるよ。」

君に伝えたい事が一杯あるんだ だから 急いで迎えにいくよ。
もう 僕は待たないよ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0538n/>

愛を読む人

2011年11月26日18時47分発行